ペリー来航と関藍梁

日本開国170周年

今から170年前の安政元年（1854）、日米和親条約が締結され、200年以上続いた徳川幕府の鎖国政策が終わりを迎えました。ここから日本は、世界に向けて新たなスタートを踏み出します。日本の歴史が大きく動いた出来事の、まさにその現場に、高島出身の人物が立ち会っていました。儒学者の関藍梁（せきらんりょう）（1805～1862）その人です。

関藍梁書「龍井堂」扁額（膳所歴史資料室所蔵）

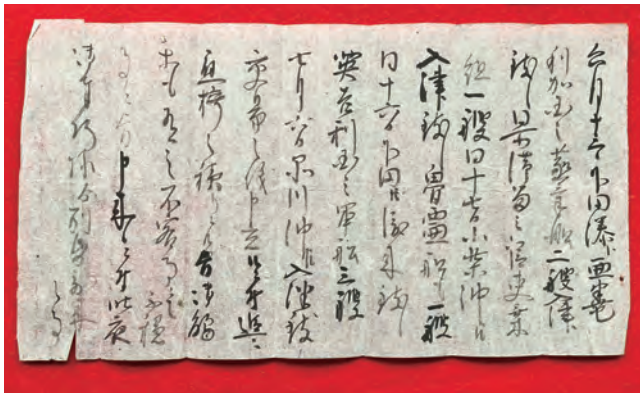
関藍梁

藍梁は東万木村（現・安曇川町青柳）の庄屋、関八右衛門宗順の子として生まれました。幼い頃から書の才能に優れ、家族にすすめられて、若くして江戸へ行き学問に励みました。

13歳の頃、師事していた薩摩藩の儒学者・石塚志堅が亡くなり、藍梁は縁あって幕府の最高学府・昌平坂学問所（しょうへいざか）の第8代大学頭である林述斎（じゅっさい）に仕えることになりました。その後、昌平坂学問所に入学してますます学問に励み、卓越した詩や書の能力に加え、温厚で優しく、おごり高ぶることのない人柄もあり、周囲から厚い信頼を寄せられて、3代に渡る林家歴代の大学頭に仕えました。

ペリーの来航

そんな中、嘉永6年（1853）浦賀沖（現・神奈川県横須賀市）にペリー率いるアメリカ東インド艦隊（黒船）が来航し、日本に開国を求めました。翌年改めて訪日すると告げたペリー一行に対応するため、幕府は横浜に応接所を開設し、第11代大学頭・林復斎を筆頭に、日本代表の交渉団を編成しました。この時、藍梁も復斎の書記役として同行したのです。


ペリー来航を知らせる書簡（個人蔵）

米国との交渉が行われる中で、藍梁は米国側の通訳を務める中国人の羅森（らしん）と漢詩の唱和をしたり、ペリーたちの姿や応接のようすを絵に描いて記録したりしていました。また、膳所藩士でもあった藍梁が偶然持参していた膳所茶をペリーが気に入り、藍梁の進言で、膳所藩では国産輸出品として大々的に茶園が開拓されたことが分かっています。

故郷高島と中江藤樹

藍梁が生涯にわたって詠んだ数多くの詩の中に、故郷高島における儒学の先覚者・中江藤樹へ想いを馳せたものが残されています。藍梁が学んだ昌平坂学問所の教授・佐藤一斎が、藤樹書院を訪れた際に詠んだ七言律詩を受けての一首です。

人生の大半を江戸で過ごした藍梁ですが、その胸中には、絶えず故郷への想いがあったことでしょう。

問 文化財課 ☎（25）8559

編集雑感

7月20日の湖西線開通50周年のイベントで、初めて出会った人同士が湖西線やお子さんのことをお話されていた光景がとても印象的でした。地域のイベントは地域を盛り上げ、人をつなぐことができるということを改めて感じました。今年度は市制20周年記念としてもさまざまなイベントが開催されています。少しでも気になったイベントには足を運んでいただけるとうれしいです。（M）

広報たかしま 令和6年 9月号 No.296
発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000㈹
https://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。